

平民大社會主義叢書

堺利彦 共著
山川均 (著)

社會主義研究

● 菊版極上紙
● 三百五十頁
● 定價送料共
● 壹圓六十錢

廣告 內容

著者は世界的に知名なる日本社會主義者の大權威なり。本書は著者多年苦心の研究に成れる大傑作なり。故に社會主義と著者との知り若くは之を論ぜんを欲せば、先づ必らず本書を讀まざる可からず。今茲に本書月刊雜誌「社會主義研究」第一卷を完結するに際し、下に本誌第一號乃至第七號所載の代表的項目を掲げ、以て本書が其内容に於て其價値に於て他の著書に比し如何に多くの誇るべき點を有するかなを廣告す。

堺利彦執筆

山川均執筆

唯物史觀論解說	通俗的社會主義
進化と社會主義	獨逸の勞働組合
社會主義の分派	組合派社會主義
空想的社會主義	勞働及剩餘價値
共產制及資本制	社會主義經濟學
兩人新刊書の批判	寒村近世財産形式

近世の財産形式

經濟學者は、現在の財産形式の中で最も優勢な資本が、永世不変であると云ふ公理を持立して居る。彼等は、資本が世界と共に昔から存し、且つ無始無終なる事を立證するに努めて居る(註一)でこの驚嘆すべき假定説を立證する爲に、有ゆる經濟學書は、一對の弓を所有せる一野蠻人が、片々の弓を仲間の野蠻人に貸して、狩の獲物の分配に預かると云ふ話を反覆してゐる。

註一 資本とは、利子を生ずる如何なる物をも云ふ。即ち、數ヶ月乃至數年後に、利益を生ずる貸金。小作の田畑。或はその所有者ならざる、賃銀労働者が用ふる労働用の器具などは、之れである。けれ共、自作農夫及びその家族の耕作する田畑、獵師の銃、大工の鉋や鋸などは、財産ではあるが資本家的財産ではない。何となれば、是れは他人から剩餘價値を抽出する爲に用ひらる、ものではなくして、所有者が自らそれを利用する物だからである。資本と云ふ言葉には、労働を要せざる利益と云ふ思想が肌着のやうに固着して居るのである。

經濟學者が、有史前の時代に於ける、資本家的財産探究に熱心なる、彼等は到所その研究中に人類以外の無脊椎動物の中に財産の存在せる事を、發見して了つた。蓋し、蟻は先見の明があつて食物を豫備貯藏する者だからである。惜むらくは經濟學者の、更に一步を進めて、蟻が食物を貯蓄するのは之れを賣却し、且つその資本の運轉に依て、利益を得るの考へに出づる事を證明しなかつた事や。けれ共、資本を永世不変なりとする、經濟學者の説には缺陷が存じて居る。彼等は資本と言ふ言葉が、いつの世如何なる時にも存在して居た事を、示すのを落して居る。凡そ船の如何なる網と雖も、鐘網を除けば、何れも固有の名稱を有せざるはない。然らば、獨り經濟學上の用語の